

# 「ブロードキャストアジア 2017」 「コミニクアジア 2017」が開催

神谷 直亮

「スマートな将来性のある技術展 (Smart Future Technology on Display)」をキーワードに掲げた「ブロードキャストアジア 2017 (以下、BA2017)」と「コミニクアジア 2017 (以下、CA2017)」が、5月23日から5月25日までの3日間シンガポールで開催された。昨年までは、「BA」と「CA」共にマリーナ・ベイ・サンズ・コンベンション・センター (以下、サンズ) を会場にして仲良く行われていたが、今年は「BA」の会場をサンテックに移していた。事務局の発表によれば、「BA」の出展者は49か国、646社・団体で、「CA」は52か国、1,158社・団体とこのことであった。

初日の朝にサンズで開催された両イベント共同の開幕セレモニーには、シンガポール政府を代表してヤーコブ・イブラヒム情報通信大臣が登壇した。同大臣は、「シンガポールを世界初のスマート・ネーションにする。このためには、シンガポールがLiving Lab (生きた実験室) の役割を果たす必要がある」と述べ、具体的には、「シンガポール政府のインフォコムメディア開発局が中心になって、高速ブロードバンドネットワーク、IoTネットワーク、5Gモバイルネットワークなどの構築を進める。さらに、最先端技術として浮上しているAI、データサイエンス、サイバーセキュリティ、VR・AR (仮想現実・拡張現実) の開発・実用化にも全力を尽くしていく」と宣言した。

サンテックの3階から6階までを使って開催された「BA2017」の会場には、予想通りパナソニック、ソニー、キヤノン、池上通信機、NEC、朋栄、リーダー電子、ヤマハ、ビレッジアイランドなどが出展して日本の存在感を如実に示していた。しかし、今回、最も来場者の目を引いていたのは、放送スタジオのIP化を目指す「IP InterOp Lab (IP Lab)」であった。

「IPをアジアに」を旗印に掲げたこのコーナーでは、世界の主だったメーカーが開

発したIP機器を組み合わせ、相互接続を検証する試みが行われた。運用システムの構築を行った中核事業者は、シンガポールのアイディアル・システム (Ideal System) 社である。機器を提供したメーカーとして名前が挙がっていたのは、ソニー、SAM、グラスパレー、デルEMC、Aristaなどだ。システムの構成図を見せてもらったら、IP Liveシステムマネージャー、プロダクションビデオサーバー、SD/HDコンバーターボードNXLK-IP40Fを搭載したシグナルプロセッシングユニットは、ソニー製であった。IPルーティングスイッチャーは、SAMとグラスパレーの2社の製品を揃えており、10Gbe入力のストレージシステムは、デルEMC社の提供とこのことであった。

「IP Lab」の現場では、このようなシステムを組んで、ソニーの「HDC-4300」、グラスパレーの「LDX86N」、ARRIの「AMIRA」の3台のカメラで撮影した映像をウーヤラのプラットフォームでストリーミングを行いスタジオで再生して来場者に見せていた。何よりも驚いたのは、オペレーションセンターをアジア系の若い技術者が取り囲み、放送システムのIP化に対する興味が非常に旺盛なことがうかがえた。

「BA」は、「NAB」の1か月後の開催ということもあり、変化に乏しいという関係者が多いが、今回、予想外の展示を繰り広げたのは、パナソニック、池上通信機、NECだ。

パナソニックは、「2017 NABショー」で打ち出した「ビジネス」戦略を露わにした展示とデモを展開して来場者の意表を突いた。その一例が、スタジアムやアミューズメントパークでのビジネスを狙った大型スクリーンへのライブ映像の投影とプロジェクションマッピングである。今回この大規模な映像ソリューションの目玉機器として登場したのは、高輝度プロジェクター「PT-RQ32K」と「PT-RZ21K」だ。ブースの担当者は、「前者は4K対応の新製品

で26,000ルーメン。後者は、今年秋に発売を予定している20,000ルーメンのプロジェクター」と説明していた。これら2製品を含め天井と床に20台を超えるプロジェクターが設置されており、パナソニックのブースは、まさにプロジェクターのオンパレードであった。もう一例を挙げると、今年8月に発売予定という360度ライブカメラシステム「AW-360C10/AW-360B10」を大々的に紹介していた。「混雑を極めるイベント会場を、4K非圧縮ビデオで広域監視ができる」というのがセールスポイントである。1988年のカルガリー以来、最高位のスポンサーとしてオリンピックをサポートしてきたパナソニックらしいビジネス展開との印象を強くした。

池上通信機は、アジアでは4K HDRより2K HDRカメラに商機があると判断し、ユニカムの新製品「HDK-73」を前面に押し出していた。ブースの担当者は、「このカメラには、2.6MフルHD 2/3インチCMOSセンサーが搭載されている。HDRはHybrid Log-Gammaカーブがベース」と説明していた。昨年、初公開したライブイベント向けの2/3インチ3CMOSセンサーを搭載した4Kポータブルカメラ「UHK-430」も展示していたが、今回は、フルHD HDRカメラに対する来場者の反応が上回っているように思われた。

NECは、同社が最も得意とする低遅延H.265/HEVCコーデックに加えて、「AIMS」のステッカーを張った「Media over IP」製品に力を入れていた。目玉は、SDI-IPの相互変換を実現するメディアプロセッシングコンバーター「MF4000」だ。ブースの担当者は、「まだ試作品の段階で、今年の秋から冬にかけて発売を予定している」と謙虚に語っていた。

「Go Beyond Definition」の旗印を掲げたソニーのブースには、同社が誇る3種のカメラ「HDC-4800」「HDC-4300」「HDC-2500」が並んでおり壮観であった。「AIMS」のステッカーが張られたIPライブコーナーでは、マルチフォーマット・ビデオ・



写真1 今回の「BA2017」で、特に目を引いたのは「IP Lab」であった。



写真2 池上通信機は、フルHD HDR ユニカム「HDK-73」の売込みに力が入っていた。



写真3と写真4 パナソニックは、今年8月に発売予定という360度ライブカメラ「AW-360C10」を出展し、ブースで実際に撮影した映像を公開した。



スイッチャー「XVS-8000」、システムマネージャー「PWS-100」、プロダクションビデオサーバー「PWS-4500」、シグナルプロセッシングユニット「NXL-FR318」、IPインターフェイス4K/HDベースバンドプロセッサ「BPU4500」などを紹介し、IP化の波に乗っていた。一方、ブースの一角に暗室を設けて2K HDR OLEDモニター「BVM-E251/E171」と4K OLEDモニター「PVM-X550」を紹介した。ソニーもアジア市場においては、まず2K HDRが先行すると読んでいるようであった。

ソニーのブースと隣り合わせた好立地に出展したリーダー電子は、4K波形モニター「LV5490」と4Kにも対応できるラスターライザ「LV7390」の売込みに力を入れていた。前者は、12G/3G/HD/SD SDIに対応しており、9インチのフルHD LCDモニターで映像の確認ができる。後者は、4系統の3G-SDI信号を同時に測定可能な新製品である。ブースの担当者は、「4Kに

もちろん対応が可能」と説明していた。

キヤノンは、コンパクトなフルHDカムコーダ「XA35」「XA30」、4Kカムコーダ「XC-15」を出展して来場者の興味を引いた。「XA35」「XA30」には、1/2.84インチ2.91メガピクセルCMOS PROセンサーが搭載されており、高感度対応になっている。「XC-15」は、12メガピクセルCMOSセンサーとワイドアングル10倍ズームレンズを誇っている。

朋栄は、3G/HD/SDビデオスイッチャー「HVS-2000」を中核に据えて、マルチビューワー、クリップサーバー、ルーティングスイッチャーを含む同社の「GearLink」ワークフローを訴求していた。

ヤマハは、昨年に引き続いて「真のフラッグシップ・モデル」と銘打った新世代ミキシング・システム「RIVAGE PM10」を大々的に売り込んでいた。ブースの担当者は、「操作性と無色透明なサウンド品質を誇る製品」とPRに余念がなかった。

ヴィレッジアイランドは、4K 60p映像をTICO形式で圧縮してSDIケーブルで伝送する「VICO-4」、高品質IP対応のマルチビューワー「FlexViewer」、DekTec製のデバイスなどを展示して注目を集めた。ブースでは、同社のシンガポールとマレーシアの社員がわかりやすく説明を行っており非常に好印象を持った。

既述の日本企業以外で特に目に付いたのは、ブラックマジックデザインだ。珍しくブースに「Argus 7」と呼ぶ3D VRカメラが展示されていた。同社製マイクロスタジオカメラ4Kを7台組み込んでおり、360 x 360の高精細天体映像を撮影することができるという。残念だったのは、撮影した映像を公開していなかった。

Naoakira Kamiya  
衛星システム総研 代表  
メディアジャーナリスト